

随 想

## お花見の思い出

欧陽 寧

“時間は矢の如し”。先日、アルバムを整理しているとき、もう七年目のお花見をしたことに気が付いた。写真を見ているうちに、いろんなことが目の前に浮かんできた。

初めてのお花見は、日本に来てから一年足らずの時だった。職場の先生に誘われ、“うちに来て、お花見をします”と言われた。“うちでお花見”と理解したが、“うち”ではなく、近くの公園だった。集合場所に着いて、まず驚いたのは、先についた方は、皆桜の木の下で大きな敷物の上に座っていた。また、目の前に季節が溢れている料理で詰め込んだ御重箱を並べていて、バーベキューのようだった。その上、一番印象に残ったのは、普段では見られない気軽な雰囲気だった。食事をしながら、日本の事情、中国の事情、それからお料理や食べ物についていろいろお話をした。言葉で通じない時に漢字を書きながら会話を続けた。しかし、“うちに来て、お花見をします”の意味を十分に理解できなかったため、食べ物を用意しないで、御主人に花束を差し上げた。

以来、毎年わざわざ観光名所に行ったり、山に行ったり、お花見をしてきた。お花見をした後に俳句や短歌を拝見したこともあった。お花見はストレスを解消するひとときと思うし、その上友情の繋がる輪の一つとも思っている。友人のお陰で、幾つかの日本料理を教えられ、また、中華料理の料理教室を開いたこともあった。お花見を通じて、日本での普段の生活にも、お付き合いについても、内容豊富になった。そのうちから生涯の友人もできた。

昔の中国人のお花見はどんなものであったのかは、調べたことがないが、現在自分の故郷でのお花見は、お花を見ながらそして写真を撮りながら公園を一回りするの是一般的である。また、中華料理の多くでは、火を通して、暖かい内に食べるのが普通のことである。冷めても美味しく食べられる日本料理のようなお弁当に適用するものはすくないようだ。

しばしばテレビで見たワシントンのホワイトハウス周辺のアメリカ人ならではののお花見、そして故郷で中国人ならではののお花見とも、日本でのお花見とは違うようだ。何故なら、お花見にその国の文化を映していると思われる。

今になって思うと、日本料理は見た目が綺麗なだけでなく、素材にも料理法にも、日本人ならではの知恵が現われている。日本料理は、低脂肪、高蛋白質、そして豊富な繊維、現代文明で言われるバランスの良い、健康にも良い食である。欧米人と比べ、日本人の場合は、大腸ガンの発生はかなり低いとの研究発表がしばしば見られる。それは日本人の食生活と確かな関係があることに違いない。現在、日本は世界一長寿国であるが、西洋料理の好みになっていく日本の若者にとって、和食の良さをどう守っていくかは、健康と食文化の課題でもあろう。

文化には言葉が欠かせない。私は、料理教室で、“餃子”の中身は、“エビ”が入っていることを“へび”と言い間違い、皆様を驚かしたこともあった。700年も前に、聖徳太子が留学生を中国に派遣してから、中日両国の文化には、長い交流の歴史がある。しかし、文化は受け入れる方で変わることが考えられる。例えば、同じ漢字の“娘”を使っても、日本語は、むすめの意味であるが、中国語では、母（はは）の意味である；日本語の“手紙”は、中国語では、トイレトペーパーと言う意味で、間違えたら大変失礼なことになるだろう。また、中国語は“紹介”と言うが、何故日本語では“紹介”と逆に言うの？今では不思議に思わなくなった。我々は日本で学んだことをそのまま他国で通用する事とも限らない。我々にとって、これからの知識の活用、それから知識を文化に溶け込ませる努力は、とつても大事なことだと思う。

健康文化には国境がない。これから、日本で身に付いた専門知識だけでなく、日本文化の良いところも母国で広めるように努力するつもりである。日本での留学生活はもうすぐ終わる。これで最後のお花見だと思うと、思い切れない淋しさがある。しかし、将来何処にいても、桜が咲く季節になったら、日本でのことを思い出すという気がする。

桜は日本国の国花である。桜には、日本人の精神が映っている。団結で皆一生懸命仕事に向かっている姿は、咲いている桜花のようだ。心から中日両国人民の友情も桜のように、年々美しく咲いていくことを祈っている。

支えてくれた人々、アリガトウ！

(名古屋大学医学研究科医療情報学専攻・大学院生)